

「いき」と「通」へのジンメルのアプローチ

桜井芳生

我々は、ジンメルが展開した「同等化・差異化の欲求」論を拡張的に展開する試みをしている。ここでは、社会的なアプローチがあまりなされていない「いき」と「通」のトピックにこの視点を適用する。「いき」と「通」に関する先行業績を援用すると「I通り者」意気「競い組」「II通」「III粋」「いき」の三類型にまとめることができる。我々はそれぞれジンメルを参考に、「威信をめぐる闘争」「マニユアルを媒介にした流行」「二つの欲求の遊戯的形式での不安定的発散」として統一的視点から解釈することを提案する。最後に、「いき」の三徴表の相互関係と、「いき」の行く末への、ある示唆を行う。

ジンメルにおける同等化・差異化の欲求論の拡張的展開へ

我々は、ジンメルが、流行論その他で展開した同等化・差異化の欲求論を拡張的に展開する試みをしている¹⁾。「流行」の冒頭でジンメルはこう述べている。「人類の歴史におけるあらゆる本質的な生の形式は、それぞれの分野で、持続、統一、同等性への関心と、変化、特殊なもの、独自のものへの関心とを合一させる、特殊な様式を示している。……一方の側は「模倣」への心理的傾向によって支えられている場合が多い。……社会制度は両者のはてしない敵対関係が共同作業の外形をとった一けつてながつづきしない一和解の観を呈するのである。……流行はあたえられた範例の模倣であり……しかも、差異の欲求、分化、

変化逸脱の傾向をも満足させる」。以上のようなあい対立する二つの欲求・傾向を我々としては、同等化もしくは同等性への欲求と、差異化もしくは差異性への欲求、とまとめておこう。以上のジンメルの記述をふまえて、我々は、人間は他者と同等化しようとする欲求と他者と差異化しようとする欲求をもっている、という仮説をたててみよう。上の引用文からわかるとおり、ジンメルにとって同等化・差異化の欲求論はたんに流行のみを説明しうる狭い仮説ではない。彼にとって流行とは、彼の「生」(Leben)の帰結としての同等化と差異化との対立を「和解」させる形式の一つのスペシャルケースなのである。だとすればジンメル流行論の同等化・差異化の欲求論は「流行」以外の社会的対象の説明にも適用可能なはずだ。我々はこうかんがえて、彼の同等化・差異化の欲求

論を拡張的に応用する試みをおこなっている。

ところで、以上のように仮説したところで、それだけではあまり認識利得を生じさせない。なぜなら、任意の者は、任意の状態においてもすでにある他者と「同等」であり別の他者と「差別的」であろうからである。ところが、ジンメルは、(同等化と差異化という)「二つの原理」は「それぞれけつして譲ることのないために、社会生活は寸土として争われない箇所のない戦場の観を呈し……社会制度は両者の果てしない……けつして長続きしない一和解の観を呈する」(「流行」原書三三頁、訳書三三頁、以下同様)という。これは、どうしてだろうか。ひとつには、これは、社会においては「差異」がほぼ不可避的に「優劣の差異(＝価値的差異)」を含蓄してしまうからであるとおもわれる。

「差異」が優劣を含蓄する価値づけに関連づけられてしまうと「差異」はもはや平和裡な「区別」ではない。このことが端的にあらわれるのが「敵対・闘争」の場合であろう。二つの集団AとBがあつたとしよう。Aの成員は同じAの成員との同等性において同等化の欲求を充足し、Bの成員とのちがひにおいて差異化の欲求を充足しているとしよう。Bの成員もAの成員に対して同様であつたとしよう。ところがここにおけるAにとつての「差異」とBにとつての「差異」とは通常おなじものではないだろう。AにとつてのそれはAのほうに「優位」を、Bのほうに「劣位」をあてがう「差異」であるだろうし、Bのそれはちょうど逆になるだろう。したがってAはBに対して「優A/劣B」の「差異」を承認させようとして、BはAに対して「優B/劣A」の差異を承認させようとして闘争状態が生じざるをえないだろう。ジンメルが「闘争の社会

学』においていう「それ自体目的」としての「形式的な敵意の衝動」とはおそらくこのことであろう。

ここでは、日本文化の理解に欠くことができなと思われのちに、社会的なアプローチがあまりなされていない「いき」と「通」とのトピックにこの視点を適用してみたい(と)。

「いき」と「通」に関する古典的見解

さて、「いき」と「通」というトピックを扱うにあたっては、我々の能力上の制約から、まずは既存の先行業績を援用したい。およそ、文化的事象の存在をその歴史的な実態のレベルで正確に再現確定することは困難であるが、以下のようにこのトピックの先行業績を概観してみると、(あくまで一つの理念型として)次々節のような「三つの類型」に図式化し、まとめることが許されるように思われる。

いうまでもなく「いき」にかんする古典的見解は九鬼周造の『「いき」の構造』である。このなかで九鬼は「いき」の三つの「徴表」をあげている。九鬼が「いき」の「基調」(二七)として最も重視するのが、第一徴表の、異性との交渉における「媚態」である。しかし「いき」においては、その「異性との交渉」は「尋常の交渉ではない」(二二)という。すなわち「媚態とは、一元的の自己が自己に対して異性を措定し、自己と異性との間に可能的関係を構成する、二元的態度である。(強調桜井、以下同様)(二二)そして「いき」のうちにみられる「なまめかしさ」などはすべて「この二元的可能性を基礎とする緊張」にはかならない、という(二二)。そしてこの二元的可能性は「媚態の原本的存在

規定」であり、「異性が完全なる合同を遂げて緊張性を失う」と「おのずから消滅する」。したがって「二元的関係を持続せしめること」「可能性を可能性として擁護すること」(二二)が「媚態の本領」であり、媚態とは「異性間の二元的・動的可能性が可能性のまま絶対化されたもの」でなければならない(二三)という。

「いき」の第二の徴表は「意気」すなわち「意気地」である。これは「江戸の意地張り」「辰巳の俠骨」「いなせ」「いさみ」などと対応する気品・気格であり、「一種の反抗を示す強味」(二四)をもった意識であり、「理想主義のもたらしめた心の強味」(二七)である。

第三の徴表は「諦め」である。「運命に対する知見にもとづいて執着を離脱した無関心」(二五)である。これは「現実に対する独断的執着をはなれた恬淡無碍の心」(二六)である。

以上、「いき」の構造は「媚態」と「意気地」と「諦め」の三契機を示すことになる。この三契機が結び付くことよって「いき」は「安撫なる現実の提立を無視し、実生活に大胆なる括弧を施し、超然として中和の空気を吸いながら無目的なまた無関心な自律的遊戯をしている」(二八)ものとなる。一言でいえば「いき」は「媚態のための媚態」(二八)なのである。

以上が「いき」に対する古典的見解だが、この「いき」と並び称される「通」との関係については麻生磯次の「水波の關係」論が古典的見解と云えるだろう。麻生は「通・いき」で「野草」との対比において通は「ものの限度を知ること」を「要件」とする(二〇八)、という。した

がって「いき」であるためには通でなければならず、「当世風」でなければならず「通」と「いき」とは表裏の關係、あるいは水波の關係にある」(二一〇)ということになるのである。

「いき」と「通」をめぐるその後の見解

このような「いき」と「通」にかんする古典的見解は、「いき」の完成期＝化政期以降においては、ほぼ妥当するものとして承認されているといえる。しかし、それにいたる歴史的過程においては、いくつかの指摘がなされている。この論点は大きく分けて三つにわけることができ。一つめは「通」にいたるいわば前史としての「通り者」「大通」の水脈の存在である。二つめは「いき」の性質として化政期以前においては(九鬼が最重要視した)「媚態」と「諦め」の性質は弱く、「意気(地)」の性質のほうが強いということである。三つめは「通」は「知識性」など「いき」とはかなりちがった属性を持っていることである。(四つめとして、上方由来の「粹」すい)から、すぐれて江戸的な「いき」への移動・異同の問題が挙げられる(中尾(一九七四)参照)が、我々はここでは取り扱わない。

第一の指摘は、おもに中野三敏(一九七六)によっておこなわれている。彼は従来あまり重視されなかった「通」の発生過程における「通り者」「大通」の系譜に着目する。中野によると「通り者」には「名の通った人」の意があり、さらにはそこから、その土地での「顔のうれた人」「顔役」「親分」をさすという。さらには「競い(きおい)組み」とも等置されている。これらを要約して中野は通り者の属性を「かねば

なれがよく大層潔く、腕力もあり命知らず」とまとめている。明和末年に「通り者」から「通者」そして「通人」「大通」「通言」の語ができて(三三六〇)、さらに一七七七年頃よりその中の「大通」が特に流行しはじめた。「大通」の性格を中野は次のようにまとめている。1、力自慢・威風自慢。2、大酒飲み・むだ使い等によって表明される大気さ。3、稚氣まるだしの行状。このような「大通」を、中野は「その直後の」天明期洒落本に展開する「通」の意識とくらべて大幅に異質なもの(三三六三)であるという。そして「大通」はばからしきものであり、男伊達・鉄火・競い組みにつながる「通り者」の「一つ」という。安永末期(一七七八ごろ)に「大通」が大流行するやすぐさまそれはしぼんでしまい、その「否定の上に生まれた理念」がその直後の「天明期の「通」(いわゆる通説でいうところの「通」)である」という。

第二の点についてはすでに麻生磯次自身が「いき」の内容は時代によって変遷がある。古いところでは「意気」の意に多く用いられている(一一〇)とのべ、用例を挙げ、「いき」は漢語の「意気揚々」とか「意気衝天」などの「意気」とほぼ同じ意味にもちいられている、と言っている。「いきごみ」「いきはり」「いきぐみ」「いきじ」などの語は、いずれも「おのが面目を立てとうそう」という意味をもっている、と麻生はいう。この点について、中野(一九八四)もほぼ同意見である。すでに述べたように九鬼は「いき」の「基調」を「媚態」であるとするのだが、中野は「いき」の基調とすべきは「媚態」ではなく「意気地」のほうである(一一三六)といい、「いき」とは「とをりもの」「大通」に一貫してなされる「意気地」の尊重の謂い(一三七)であ

るという。

第三の点天明以降の「通」の性質については、ほぼ通説によって意見の一致をみているといえる。ただし麻生が「いき」と「通」とを「表裏」「水波」の関係といったのと比べると、かなり「いき」の属性からはずれている。論者の意見を総合すると「通」の属性として以下の点が挙げられる。

- 1、知識に通暁する意が強い(中村二八六、水野三二、神保三八一、『江戸学辞典』二一九七)
 - 2、流行に通じている。「髪のかい方、衣裳、持ち物、流行語なども、遊里生活の間から尖端的なものを学び、世間一般の風俗姿態の先頭にたつのが通人とされた」(麻生一〇六、cf 中村二八三)
 - 3、瑣末主義・こり性(中村二八四)
 - 4、自己優越をしめす虚栄心(中村二八八)
 - 5、自己陶醉・独善性の危険性。「どうでもよいことの範囲へますます入り、他人の通ぜぬ世界に自ら一つの境地を作る。……本人にはそこが万人至りえぬ境地であり……知る人ぞ自己陶醉がある。すなわち手前味噌で……。(中村二八四)」
 - 6、相対性。「通と半可通とは紙一重であるともいえる。……同じ一人が、見る人により、見る位置により、時によって通となり、時に半可通に見えるのではなからうか。(中村二八四)」
- これらの「通」の性質は、天明期における「通」の流行が「洒落本」の流行と不可分の関係であったことに対応していると思われる。洒落本とは明和末年に形式内容をととのえ、天明期に一つの全盛を迎える遊里

文学の名称である。主にそれは、小本一冊のなかに一昼夜の遊興を時間的に展開するもので、洒落本は別名「通書」とも呼ばれ現代の研究者の一部からは「通の教科書」とも呼ばれている（麻生、水野、神保、中尾）。通を自負する半可通（あるいは野暮な国侍）と純真な息子（あるいは通人）とを配して、風俗・慣習・用語・動作などの外部的事象を徹底した写実的手法で表現し、半可通の行動を徹底的に暴露して嘲笑するというスタイルがほとんど踏襲される。

ただ注意しなければならないのは「通」と「洒落本」との関係は、たんなる「教科書＝手本」といった単純な関係ではなく、一種の両義的な関係となっており、「通」に対して、批判・風刺の側面ももっているのである。この両義性の批判的・風刺的側面を指摘したのが中村幸彦である。彼は、洒落本は「通の風刺」（二八七）であり、「洒落本は通をうがったものであり、通の教科書と見えるのは、談義本の教化的風体を、外見に持ち伝えているからであり、本質は教化でもなんでもない。」（二八七）という。

これに対して水野は「洒落本」が「通の教科書」的性質をもっていることを主張する。しかし「通」と洒落本との関係が一種の「矛盾撞着」（三〇）「自己嫌悪」（二八）におちいることは認めている。水野は洒落本を「うがち」の文学だとかんがえる。「うがち」とは、「普通には気付かれない世相」などを「探りだし指摘してみせる」（二六）ことである。しかし、それが知識の性格の強い「通」と「洒落本」にむすびつくと、「うがちの姿勢をとって素材としての珍奇さを絶えず求めなければならぬ」（二六）くなってしまう。洒落本における「通談義」において

は「通の内包的性質がさまざまな知識の項目羅列の形で示される」のだが「そのような流行現象と論議の対象となったがゆえのそれは人間の価値意識を伴った生活理念からは、だんだん遠ざかって行き、どうにも処理できなくなつ」（二七―二八）てしまうのである。こうして、あまりに微細な知識項目に固執する「通」からの意識変化が生じてくる。

そして、たとえは

「いきにしていきをみせず、穴を知つて穴をいはず（安永七年「契情買虎之巻」）」

「派手にして、派手にあらず、いきにしていきをみせず、洒落を知つて穴をいはず（天明元年「雲井草紙」）」

といったような「外面にはひかえめに発現させる態度」や「情意の激しさに巻き込まれることもなく常に中庸を守つてゆく生活の知恵」「繊細でしかも地味な洪さを尊ぶといういわゆる江戸趣味」（二八）の意識がおこつてくるのである。水野が「知識よりもむしろ、感覚・情緒にすぐろうとするところに「粋」から「いき」への道にたちもどろうとするのである。」（三三）といっているとおり、これはむしろ（九鬼が対象としたような）「いき」の意識に近いものだといえよう。

三つの類型

以上、我々は、「いき」や「通」に関する先行業績を概観してきたが、以下これらを援用して、これらの社会意識を、議論の便宜上、図式的に三つに類型わけしたい。

I 通り者・意気・意気地・大通・競い組（・男だて・鉄火……）のグ

ループ。(以下約して「通り者」意気「競い組」と書く)

これは、中野が指摘する、いわば「通」の前史の「通り者」「大通」の社会意識と、麻生や中野が指摘する「粹」「いき」の前史としての「意気」「意気地」「大気さ」などを、中野の示唆(本稿前節参照)にしたがってひとまとめにしたものである。属性としては、1、威風自慢
2、面目(「顔」「名」)の尊重 3、無駄遣いなどの大気さ 4、稚気まるだし、などが挙げられる。時代としては、およそ、享保から安永(二七二六—七七九)に盛んであったと言える。

II 「通」(中野が天明期以降の「通」というところの)類型

我々が、前節で洒落本との関係で述べてきたところの「通」である。属性は、前節に述べたとおり、「知識偏重」「流行重視」「瓊末主義」等。時代的には、およそ、安永から寛政(二七七二—二七九九)、にかけてである。

III 「粹」「いき」の類型

九鬼が対象としたところの「いき」に対応する。属性としては、九鬼のいう「媚態」を基調とする。いうまでもなく、九鬼のいう「媚態」はたんにひとに媚びることではない。異性間の「動的二元的可能性」が「可能性のまま絶対化されたの」でなければならぬ。両者が「完全なる合同を遂げて緊張を失う(すなわち二元性が一元化される)「桜井」場合には媚態はおのずから消滅する」(二二二)ものなのである。このような「媚態」を基調とする「いき」は、「意気地」と「諦め」という「形相因」(二一九)をともなつて、「安価なる現実の提立を無視し、実生活に大きな括弧を施し、超然として中和の空気を吸いながら、無目的な

また無関心な自律的遊戯をしている」(二二八)ものとなるのである。すなわち「媚態のための媚態」(二二八)なのである。時代的には、文化・文政期以降(一八〇四—)に対応するとみてよいだろう。

二つの欲求の充足形態として

さて我々の提案は、これらの三つの類型をジンメルの要件の二つの欲求の充足形態として解釈することである。順に検討してみよう。

I 通り者「意気」「競い組」

これに関しては、ジンメルの「闘争」(『社会学』第4章)における「それ自体目的」としての「闘争」が参考になる。ここでは、なにものかのために「争い」が行われるのではなく、ただたんに端的な「優劣」の「差異」「威信」のみが賭けられている。こうしてライバルとの競争において差異化の欲求の充足が目指される。「競い組」という言葉にあらわれているとおり、彼らの多くは徒党を組む、このことで他者との同一視を行っていたものとおもわれる。もしくは、単独者である場合でも「顔が通る」「名が通る」ことからわかるとおり、「観衆」オーディエンス」が前提になっているようにおもわれる。「通り者」や「大通」にあこがれるオーディエンスは、あこがれることで、「通り者」と自らを同一化し(同等化の欲求の充足)、その「通り者」の威信を借りることで、そのライバルを見下す「差異化を行う(虎の威を借る狐)。他方、「通り者」自身も、オーディエンスからの同一視を受けることによって自分が完全に孤立することからまぬがれる(同等化の欲求の充足を果たす)。したがって、「競い」において賭けられているのは、たんにライ

バルとの優劣の差異Ⅱ威信だけではない。そこには彼にあこがれるオーディエンスの支持Ⅱ同一視もかけられているのだと思う。したがって通り者にとって、ライバルとの「競い」に敗北することは、他者（ライバル）との「差異」を失うのみならず、他者（オーディエンス）との「同等性」をも失うことを意味するのである。また、ある「通り者」にたいして多くのオーディエンスから同一視がなされることによって、その「通り者」の威信は、たんに彼個人の威信をあらわすだけでなく、彼を支持するオーディエンスの威信をも引き受けた多大なる威信が賭けられてしまう（ちょうどオリンピック選手が「日の丸」を背負って戦うように）。したがって「通り者」たちの「威風自慢」「おのが面目を立て通そう」とする行為は、限り無くエスカレートしてゆくことになる。そのため彼らの行状は「ばかばかしい限りを尽くしたもの」（中野三六二）となる。これが「大通」であろう。そのため「大酒呑み」「無駄づかい」などにあらわれているような一種ポトラッチ的な消尽にまでいきつくことになるのだと思う。

中野のいうとおりだとすると、このような「通り者」「大通」の「ばかばかしさ」（三六三）が批判され、否定された上に天明期の「通」が生じるのである。

Ⅱ「通」

第Ⅱ類型の「通」を、我々は「教科書Ⅱマニュアル（洒落本）」に媒介された流行」として解釈したい。

すでに述べたように、「通」の大きな属性は流行的知識への通暁ということである。しかも「通」の特色は、それが、「洒落本」によって媒

介されていることにある。洒落本の読者は、洒落本を読むことによつて、どのような「風俗・しぐさ」が「当世風」でありそれゆえ「通」であるかを知ることが出来る。そのことによつて彼は「世間一般の先頭」（麻生）と同等化しつづ、それを知らない者（野暮）との差異化（優位化）をはかることができる。

ところが、すでに洒落本によつて公開されてしまった風俗は、もはや独占しておくことはできず、多くの人の共有する（しうる）ものとなつてしまい、差異化の充足をはたせなくなつてしまう。そこで、次の洒落本は、すでに流布している知識をもはや「通」でないものとし、さらに微細な知識を提示することで、前者との差異化をはからざるをえないであろう。「いき」には「いきー野暮」の二項対立しかないのに、「通」に関しては「通ー半可通ー野暮」における「半可通」というような第三項が生じているのは示唆的である。正の循環をはじめしまった「通↓洒落本↓通↓洒落本……」の再差異化のサイクルにとつて重要なのは、もはや「通/野暮」の峻別ではなくて「通/半可通」の峻別になる。（事実、「半可通/野暮」の対比においては「野暮」は必ずしもマイナスイメージでは語れない。「野暮」よりむしろ「半可通」こそが、忌避すべき状態なのである。すでに一般化してしまった「通」の水準に、たえず「半可通」のレットルをはりつけていくことで、再差異化のはたらきをはたしてゆくこと、これが、洒落本の「スタイル」（本稿前々節）となる。したがって、洒落本の記述は、世に流布している「通人」が「半可通」にすぎないことを「諷刺」することをもつぱらとするようになる。中村が洒落本を「通の諷刺」とみたのは、この点に着目したから

ではなからうか。

したがって、「通」は、「当世風」の「知識に通曉する」「流行に通じている」面が強く、それが上述のポジティヴ・フィードバックにのることによって、「瓊末主義」におちいりやすい。また、たえず「半可通」と差別化をおこなうために「自己優越を示す虚栄心」におちいりやすく、「自己陶醉」になりやすい。また、ある洒落本によって「通」とされていた状態が、つぎの洒落本では「半可通」とされてしまうこともよく生じる。したがって、ある人が「通」であるか「半可通」であるかは、「見る人により、見る位置により、時によって、「相対的」となるだろう。

いうまでもなくこのような「通↓洒落本↓通↓洒落本↓……」のひきおこす再差異化のポジティヴ・フィードバックのもたらす帰結は悲喜劇的である。水野のいうとおり、「知識の項目羅列」において、「珍奇さをたえず求めなければならない」洒落本は、やがて「生活理念からは、だんだん遠ざかって行き、どうにも処理できなくなつて」しまい、一種の「矛盾撞着」「自己嫌悪」にいたつてしまう。我々のことではいえば、再差異化のゲームの果てに、あまりに差異が微細なものになつてしまい、もはやだれがこのゲームの勝者(Ⅱ「通」)なのか敗者(Ⅱ「半可通」)なのかみわけがつかなくなつてくるのである。洒落本において何が「通」であるかについてウンチクを云々する作者Ⅱ通人が、そこで諷刺されている半可通とほとんど等しくなつてしまうのである。我々は以上のように解釈する。

こうして、次の段階として、水野がいうところの「知識よりむしろ感

覚・情緒にすがろうとする」ような「通」が生じてくる。これは、我々の図式においては、もはや第三類型「粹Ⅱいき」に属するものといえよう。

III 「粹Ⅱいき」

第三類型の「粹Ⅱいき」は九鬼のいうとおり、異性間の「動的二元的可能性」が「可能性のまま絶対化されたもの」としての「媚態」を基調とする。九鬼のこの「媚態」に関しての記述と非常に類似した記述を我々はジンメルの中にみいだすことができる。「コケットリー」(媚態)(ジンメル「一九一一」所収)である。ジンメルによると「コケットリー」(媚態)とは、「所有と非所有」「与えることと与えないこと」「接近と離反」「承諾と拒絶」「露出と隠蔽」「獲得可能と獲得不可能」というような二元的対立物の「いきいきとした相互交換」「たがいの絡み合い」であり、この二元的対立に「不安定な平衡をもたせること」(二二〇、一一九)なのであり、二元的対立の「不安定な遊戯」(二一〇六、一〇五)なのであり、「承諾の回り道であるかもしれない拒絶」と「背後に可能性として取消がたっている承諾」とを感じさせる「持続的形式」(二二三、一一二)なのである。これは九鬼の「二元的関係を持続せしむること、すなわち可能性を可能性として擁護することは、媚態の本領であり」(二二三)という記述とほぼ同等であるといえるだろう。また九鬼の「二元的平衡を軽妙に打破して二元性を暗示する」(五八)「うすものの透かしによる異性への通路開放とうすものの覆いによる通路封鎖」(五一―五二)に対応すると言える。

ジンメルによると、「コケットリー」は、以上のような二元的対立の

「いきいきとした相互交換」「不安定な遊戯」であり可能性の持続であるがゆえに「コケットリーはあらゆる最終的な決定において終わる。」

(二〇六、一〇五)つまり、「最終的な決定状態」においては、「接近と離反」などの件の二元的対立が「接近」などの一方へと解消してしまひ、二元的対立が一元性へと変化し、「コケットリー」の緊張性が、消滅してしまうのである。これは、九鬼の「この二元的可能性は媚態の原本的存在規定であつて、異性が完全なる合同を上げて緊張性を失う場合には媚態はおのずから消滅する。」(二二二)という記述と等価だと言えるだろう。

ジンメルによると、このようなものとしての「コケットリー」は、「現実」ならびに現実の「目的」に対して、以下のような関係となる。

「彼女(コケティッシュな女性)は、この振る舞いが現実の系列の中で近づいてゆくはずの「目的」を拒否し、遊戯の純粹に主観的なよろこびへと揮発させてしまう。社交が社会性の遊戯形式であるように、……コケットリーは、愛の遊戯形式である。遊戯は未来をもたない。それは現在の魅力のなかで尽きる。遊戯には瞬間を越えてゆく現実の目的論が欠けている。」(二一七、一一六)これをジンメルはまた「コケットリーは……最高度に「目的なき合目的性」だ(一一六、一一五)ともいつている。さらに「コケットリーは、手段もしくはたんなる一時性の役割を完全に離れて、最終価値という役割に移行する。」(一一六、一一五)ともいつている。これは九鬼の「いき」は安価なる現実の提立を無視し、実生活に大胆なる括弧を施し、超然として中和の空気を吸いながら、無目的なまた無関心な自律的遊戯をしている。一言にしてい

ば、媚態のための媚態である。」(二二八)という記述と驚くほど類似している。

さて、ジンメルというところの以上のような二元的対立は、彼の思想において、どのように位置づけられるのであろうか。すでに予期されている読者も多いと思うが、「コケットリー」におけるこの「三元性」は、我々があつかつてきた同等性と差異性への欲求・傾向を生み出した「生」をめぐるあの二元性のひとつの展開物なのである。ジンメルは「コケットリー」の章においてこうのべる。

「それ(所有と非所有の対立)はおそらく、我々の生 *Leben* の成立が二つの原理の共同作用によつて条件づけられていることと結びついているのであろう。人間一般は二元論的な存在であり、人間の生と思考は両極性という形式において運動し、すべての存在内容はその対立においてはおじめておのれを見出し規定する。」(二二二、二二二)

つまりジンメルにとつて「コケットリー」を成立させる「接近と離反」「所有と非所有」*etc.*の二元的対立は、「生 *Leben*」から生じるさまざまなあの二元的対立の一つのスペシャルケースなのであり、その意味で「同等性への欲求」と「差異性への欲求」の二元的対立との等価物である(端的に言い切つてしまえば、ここでの「接近」とは二者の「同等化」であり、「離反」とは「差異化」のことである)。

以上の九鬼とジンメルの記述をふまえて、我々の第III型「粋いき」を、異性間において同等化⇨接近の要求と、差異化⇨離反の欲求との二元的対立を、現実を超越した自己目的的な遊戯的形式のもとで、不安定の平衡の形で充足⇨発散してゆく戦略と解釈することを我々は提

たらず欲びとは別の水準の「欲び」が生じるのである。そして、これが「いわば実質的な性愛の欲びを凌駕するまでになることがある」(一四、一三)のである。したがって、ここにおける「戯れ」は、一見、対象(異性)(との合一)をめざしているようにみえながら、もはや、その対象や目的に依存してはいない。それゆえ、この「戯れ」の形式は、「目的なき合目的性」(ジンメル)・「自己目的」的(九鬼)といわれるのである。

結びにかえて

第Ⅰ類型の「通り者」意気」と第Ⅱ類型の「通」は、それぞれメカニズムの果てに、破局的な結末もしくは自己撞着におちいつてしまった。それに対して第Ⅲ類型「粹いいき」は不安定ながらも、その「二元的対立」が、「可能性」のまま平衡しているかぎり消滅することもしなければ破局にいたることもない。あるいは、こういえるかもしれない。すなわち、第Ⅰ類型と第Ⅱ類型のゲームにおいては、どちらもふるまいはエスカレーションしていくばかりで「均衡解」が存在しない。それに対して、第Ⅲ類型においては、不安定ながらも「均衡解」が存在する(すなわち「粹いいき」は安定解ではないが存在解ではある)、と。この第Ⅲ類型の解は、安定性をもたないが、存在するという点においては、第Ⅰ第Ⅱ類型のゲームとは、本質的に性格が異なる。その意味で、第Ⅲ類型の「粹いいき」は、「成就しがたいものではあっても、成就しえないものではない」成就し得るものである」として当事者たちに思念されよう。「通り者」意気」や「通」が一時的には大流行

第一表

	我々の解釈	結末	参考になるジンメルの叙述
I 「通り者=意気=競い組み」	「威信=(優劣)の差異」をめぐる闘争、徒党による同等化、オーディエンスとの同等化	「ばからしさ」へのエスカレーション	「闘争」(『社会学』) 「それ自体目的としての闘争」
II 「通」	「マニュアル=洒落本」を媒介にした流行、「半可通」と「通」の再差異化が重要主題、	再差異化のポジティブ・フィードバックの果ての「自己撞着」	「流行」(『哲学的文化』)
III 「粹=いき」	接近=同等化の欲求と離反=差異化の欲求との二元的対立を、現実を超越した自己目的的な遊戯的な形式のもとで、不安定の平衡のかたちで充足=発散する類型	不安定平衡にとどまるかぎり、消滅にも破局にもいたらない、	「コケットリー」(『哲学的文化』)

しつとも持統的とならず、それに対して「粹いいき」が化政期以降、近代日本にまで影響を与えているのは、一つにはこの点に起因しているのではないだろうか。つまり、「粹いいき」は、日本人にとって「成就したいけれども、成就しうるもの」として、いわば文化における一つの「理想態」として働いてきたのではないだろうか。

以上の解釈を表にまとめると、右の第一表のようになる。

以上、我々は、ジンメルの「同等化・差異化」の欲求論の視点を「いきと通」のトピックに適用してみた。このような我々の試みはどのような認識利得をもたらし、そしてまた新たな課題へと我々を導くだろうか。この点についてすこし述べて結びにかえたい。

第一のメリットとして、我々の試みは、「いき」の前史（「いき」の形成史）における第I類型・第II類型を明示化し、それらと第III類型の「粹いいき」を、一つの統一的な視点から把握することを可能にしたと思う。これまで、「いき」に関する社会学的なアプローチは、(我々の言い方でいえば) 第III類型のみをあつかっていた。これに対して、国文学者や歴史家は、第I類型や第II類型を見出しはいたけれども、それらが、いかなる連関をもって、第III類型の「粹いいき」へと展開していったかは、述べられていなかったと思われる。

第二に、我々の試みは、九鬼のいう「いき」(我々のいう第III類型)における「三つの徴表」(媚態・意気地・諦め)の相互関係がある程度明示化した、と思う。これまで、九鬼のいう「いき」の三つの徴表の相互関係は、必ずしも明らかにされてこなかったと思う。これに対して、我々の理解においては第一図に示したように、三つの徴表の相互関

係がある程度あきらかになった、と思う⁽³⁾。

第三に、我々の試みは、特殊日本的とされがちな「いき」を「一般的文脈」のなかに置き直して検討することを可能にしたと思う。ただし、本稿の段階では、「媚態」コケツトリ」として解釈された「いき」が、全く「特殊日本的な」種差を含んでいないものであるかどうかは、検討できなかった。とはいえ、「特殊日本的な」種差の有無を検討する前提としても、それを一般的文脈のなかに置いてみることは必要であると思われる。

次に課題としては、第一に、日本文化内部での「いき」の位置づけという課題が挙げられるだろう⁽⁴⁾。

第二に、(いま、第三のメリットにおいてのべたことと関連するが) 日本以外の文化形象との比較があげられる。日本文化から直接生じたわけではないジンメル社会学の視点を適用することは、このような文化間比較にとつて有利なスタンスをもたらすだろう。

(1) 筆者は、(桜井、一九八九)において、ジンメルにおける「同等化・差異化」の欲求の位置づけとその彼自身の展開をあとづけ、筆者自身による展開として、日本社会(民俗社会と江戸社会)の分析をおこなった。

(2) 「いき」や「通」に関する社会学的アプローチとしては、(大野、一九七七)〔高坂、一九八四〕〔Kosaka, 1989〕(佐々木、一九七八)などが挙げられる。このうち、(大野、一九七七)にジンメルへの言及がある。

(3) 「六面体」の図で有名な「いき」の外延的構造については、触

れることができなかつた。今後の課題にしたい。

(4) 「大野、一九七七」(佐々木、一九七八)においては、ここで言及した「いきの日本文化内部での位置づけ」が探究されている。

(日本社会学会大会・東大言語研究会でいただいたコメント、ならびに本誌のレフェリー両氏からいただいたコメントに感謝します。また中野庸子氏の助力に感謝します。御批判・御意見をお寄せください。千一六六 杉並区成田東一六六―九)

主要参考文献

麻生磯次 一九五一「通・いき」『日本文学講座第七卷』河出書房
広末保 一九六〇「近世文学における料と通」『国文学五一〇』

神保五弥 一九六九「江戸町人の美意識―料と通をめぐって―」講座 日本文学の争点4 明治書院

小高恭 一九八八「いき」の構造 岩波書店、一九七九岩波文庫
高坂健次 一九八四「いき」の構造の代数学的構造について』桃山学院大学社会学論集1 一八一―

Kosaka, Kenji 1989 'An Algebraic Reinterpretation of IKI NO KOZO (Structure of IKI) *Journal of Mathematical Sociology* 14 (4)

水野稔校注 一九五八「黄表紙 洒落本集 日本古典文学大系五九」岩波書店

水野稔 一九七四「通」の文学的考察』江戸小説論叢 中央公論社
中村幸彦 一九七二「通と文学」中村幸彦著述集第九卷 中央公論社

中野三敏 一九七六「通」、栗山理一編『日本文学における美の構造』雄山閣

一九八四「すい・つう・いき」講座日本思想第五卷 東京大学出版会

中尾達郎 一九八四「すい・つう・いき」三弥井書店
西山松之助他編 一九八四「江戸学事典」弘文堂

小本新造他編 一九八七「江戸東京学事典」三省堂
大橋紀子 一九八七「粹・意気・通と仇」武蔵野書院

大野道邦 一九七七「日本の文化―いき」と「甘え」―西村先生退官記念論文編集委員会編『日本の文化』晃洋書房(南博編 一九七九「現代のエスプリ いき・いなせ・間」に再録)

桜井芳生 一九八九「同一化と差異化の社会学―シンメル流行論の再検討から―」東京大学社会学研究科修士論文

佐々木光 一九七八「甘え」と「いき」の社会構造―地域比較を中心に―伊藤章・内藤莞爾・佐々木光編『近代社会学の諸相』御茶の水書房

Simmel, G. 1898, *Die Selbsterhaltung der sozialen Gruppe*. 大鐘武訳 一九八六「社会集団の自己保存」『シンメル初期社会学論集』恒星社厚生閣

1908, *SOZIOLOGIE Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*. 堀喜望他訳 一九六六「闘争の社会学」法律文化社、居安正訳 一九七〇「支配論」社会学 青木書店、居安正他訳 一九七二「集団の社会学」ミネルヴァ書房、居安正訳 一九七九「秘密の社会学」世界思想社

1911, *Philosophische Kultur*. 円子修平他訳 一九七六「流行」『コケットリ』シンメル著作集7 文化の哲学』白水社

1917, *Grundfragen der Soziologie*. 清水幾太郎訳 一九七九「社会学の根本問題」岩波書店

1918, *Lebensanschauung*. 茅野良男 一九七七訳『シンメル著作集9 生の哲学』白水社

1918, *Lebensanschauung*. 茅野良男 一九七七訳『シンメル著作集9 生の哲学』白水社

1918, *Lebensanschauung*. 茅野良男 一九七七訳『シンメル著作集9 生の哲学』白水社

—— 1918. Der Konflikt der Modernen Kultur. 生松敬三 一九七六訳

『シンメル著作集6』白水社

(東京大学大学院博士課程)